

# タタラをめぐる歴史と民俗

鳥取県日野郡日南町湯河民俗誌(一)

中 島 誠 一

## はじめに

今回の調査では、中国地方のタタラ地帯に於ける一農村ということで、当地を選んだ。

従来タタラに関する研究は、その特殊生業漂泊民としての側面のみが非常に強調され、周囲の村落との関り合いは、余り顧みられることのなかったように思う。よしんば対象とみなされたにせよ、それは常に経済的側面の重視されるのが常であった。それゆえ本論では、やや視点を変え、タタラと一農村の関り合いを踏まえつつ、金屋子神の与えた影響等にも言及してみたい。

## (一) 村のくらし

一、一四三メートルの稲積山から発した小さな流れ

は、やがて深い谷をきざみつつ日野川となる。その谷合いの開けるところ、四十軒ほどの民家が点在している。

最近、村のすべての家は、新築、改装をおこない以前の姿をしのぶことは難かしい。草屋根のころには、十二月になるとヨウソウのカヤ山<sup>(2)</sup>にカヤ刈りに行った。カヤを何把も寄せ葛で巻き一グロにして、山の斜面に干す。

それを春になると取り入れて、家のマヤの天井に積み重ねて何十年と保管する。葺き換えの時期が来ると、クドでスポった屋根裏のカヤとマヤに寝かしておいたカヤとを適当に混ぜ合わせて葺く。スポったカヤほど強いものだ。戦後、草屋根にトタン覆いをする家が出て来た。急速に草屋根は姿を消し、今ではトタンで覆った家も滅多と見られない。以前のカヤ山も、雑木が生い繁り、足を踏み入れる人さえない。村のブアイ山<sup>(4)</sup>であった出立山<sup>シツダテ</sup>



を、近年、奈良の造林師に売って現金が入った。村の人は、近頃はこぞって家に金を費した。

刈り入れがすむころ、湯谷川の水が終日ドロドロに濁る。鉄穴<sup>カシナ</sup>流しの時期が来たのだ。九月の中旬から二月いっばいを一クルビ<sup>⑤</sup>と呼び、その期間は出立山で鉄穴を流す。川床は次第に砂で埋まっていく。

湯河<sup>⑥</sup>の冬は早い。十一月も末になると例年初雪をみる。二毛作の出来ないこの村の人々は、現金収入を得るため山に入る。ヤマコ、カンナジ、ガンテツモン<sup>⑦</sup>など山仕事に従事する者に与えられた名称は多い。その人々のほとんどが、この村で呼ぶ小作であり下作家<sup>ゲサヤ</sup>であった。その内でも、長男以下はヤロウ子と呼ばれ、炭焼など山仕事をもっぱらとした。専業と言っても自分の山を持っているのではない。山持ちに使われるのである。

村の中で困窮して、ついにタタラモンとなる人も出て来る。山内<sup>ヤマウチ</sup>に入って他国者と共に労働するわけである。そういう者をさして「水呑み百姓が貧乏して鉄山にあがつた」と言ったものだ。しかし、湯河では古老の知る限りタタラモンとなった人は、一人しかいない。そのタタラも洋鉄に押されて、大正の末ごろには全く姿を消した。

湯河の冬は長い。三月末だ根雪の融けない内から、牛

馬での田ごしらえが始まる。四・五月の過ぎるころ、一町位の田をようやく準備する。収穫のころになれば千齒でこぎ、ドロ臼でひく。湯河は多里五ヶ村<sup>⑧</sup>の内でも馬の名産地<sup>⑨</sup>として知られていた。タタラのあるころには駄賃稼ぎのために、そして第二次大戦の時にはサラブレット系の馬を飼って、広島に軍馬として出した。鉄穴をうったあと山は、所々に池も出来ていて牛馬の飲み水には事欠かない。雑木の繁みは、牛馬が暑さをしのぐにも好都合だ。湯河ではそれを利用して、夏の間は放牧をした。冬になると、牛馬は、家のニワの一角に設けられたマヤで飼われる。牛馬を家族の一員として大切に扱った。正月には、牛馬の年取りと言って、家族と一緒に餅を食べさせたものである。七月七日を盆のナノカビ<sup>⑩</sup>と言って、この日、牛馬を川に入れて瓜の裏まで掃除した。今では、村中で二匹が、肉牛として飼われるのみである。

## (二) タタラの歴史

『日野郡史』によれば「本郡の林野は推定面積約六万町歩と算せられ、本郡総面積の九割を占む。明治維新前までは、交通極めて不便にして本郡に最も接近せる米子、安来の両港に出づるにも数里の道峠を駄馬によりて輸送さるる状態にありしを以て、昔時林産物の安価なり

し時代に於ては本郡の林産物を郡外に移出することは至難の事に属せり。然るに本郡には古来豊富にして良質な砂鉄鉱の産地として知られ製鉄業盛なりし。その鉄冶金の燃料として多量の木炭を需要せし故郡内数万町歩の山林に繁茂せる材木は悉く木炭に焼製して郡内の製鉄工場に消費されたるをもつて往時山林の価値少き時代にも既に有利に利用されたるものと云ふ可し。」とある。

右の記事から日野郡における製鉄業の盛んな様子が察せらるるが、私の調査したここ日南町湯河もその例外ではない。現在、湯河で確認出来るタタラ跡は三ヶ所、一つは出立山、一つは清滝、そして鑪谷尻である。その内でも聞き取りによって往時の様子を復原出来るものは、出立、清滝の両タタラにすぎない。勿論、操業が停止されてから既に六十余年が経過、村人の記憶から消え去るうとしていることもある。が、それより大きな理由は、タタラに従事していた人々、そのほとんどが他国者であったこと、そしてそれらの人々は、この村には全く定着しなかったということである。とは言え稲作のみでは到底生活を立てていけなかったこの寒村にあって、タタラは昔から大きな現金収入の途であった。それは鉄穴場で砂鉄を採集することであり、タタラズミ、カジヤズミ(註)を焼くことであった。そして駄賃付けと言って、馬で炭、砂

鉄を山内に運び込むことであり、製品化された鉄を運び出すことであった。確かに村人は、山内で直接に働くことはなかった。しかし以上のような数多の機会に山内の様子をまのあたりにし、脳裏に鮮明な印象として刻み込むことも多かったと思われる。

#### (イ) 清滝 タタラ

湯谷山には、新旧二ヶ所のタタラがある。鑪谷尻と、明治二十九年に開設した清滝タタラ(註)である。鑪谷尻は、寛永十年の御図帳に、その小字名が登場する。よってその成立は以前に遡ることが可能と思われるが、詳細は全く不明である。それに較べて、清滝タタラは年代も随分降るため、村の人の記憶も鮮やかである。特に山内が、住居のすぐ裏であった山田武美氏の話は正確と思われる。以下、山田氏の話を参考にして、主に清滝タタラの概要について説明を加えて行きたい。

図2にも明らかなように、高殿(註)は、かなり大きな建物である。その屋根は、木の皮をへいで、長方形に小さく切りそろえ、貼り合わせた粉葺(註)である。屋根の上はたいらで、二つの水桶が設置されている。とにかく火を使う仕事なので、粉葺にすぐ火が点く。そうするとバンゴが懸命にはしごを駆け登って、桶の水をかけて消す。高殿の四方の堀立柱は、股の有るクリの木を利用する。根元

は、腐らぬよう充分に焼き込んである。

高殿の内部を簡単に図3で示したが、清滝タタラでは、赤目<sup>(64)</sup>を原料として銑<sup>スズ</sup>を製造していた。熔鉱炉<sup>(65)</sup>の下手に銑のたまる池がある。ここに融解した銑がたまるわけだが、池が一杯になれば、適宜溝に灰を入れてせきとめる。溝には銑よりも軽いカナクソ<sup>(66)</sup>が一面に浮いている。流し出した銑は、型にはめてボウ銑として、カジヤ<sup>(67)</sup>に出していた。この銑押の途中サネ<sup>(68)</sup>が出来る。これはとり出して、図4に見える金池に入れたものらしい。これは

鋳<sup>コウ</sup>になる。鋳は、合力<sup>ゴウリキ</sup>が割って、ワラのカマスに入れ、村の人達が馬で運び出した。

銑は一代<sup>ヒト</sup>で約八十駄を生産した。一代とは四日四夜の操業単位を示す。いわば土炉の耐久の限界である。清滝タタラの敷地面積は約千坪、その中に高殿、本小屋、金池、風呂、道具置場、馬のつなぎ場などがある。馬で運ばれて来た砂鉄、炭は、それぞれカンマチ、シモマチと呼ばれる貯蔵小屋に入れられる。タタラは、一年中操業していたわけではなく、夏期は停めている。清滝タタ

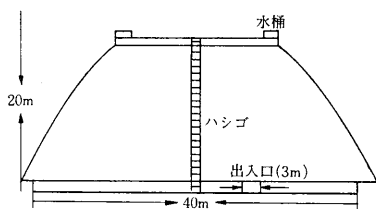


図2 高殿 (タタラ)

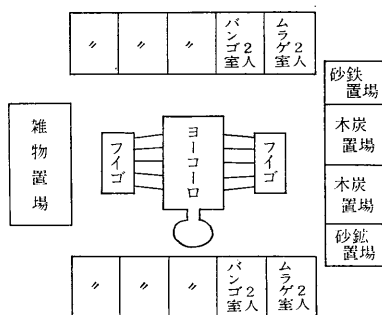


図3 高殿内部

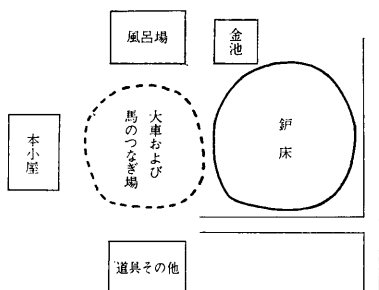


図4 山内略図

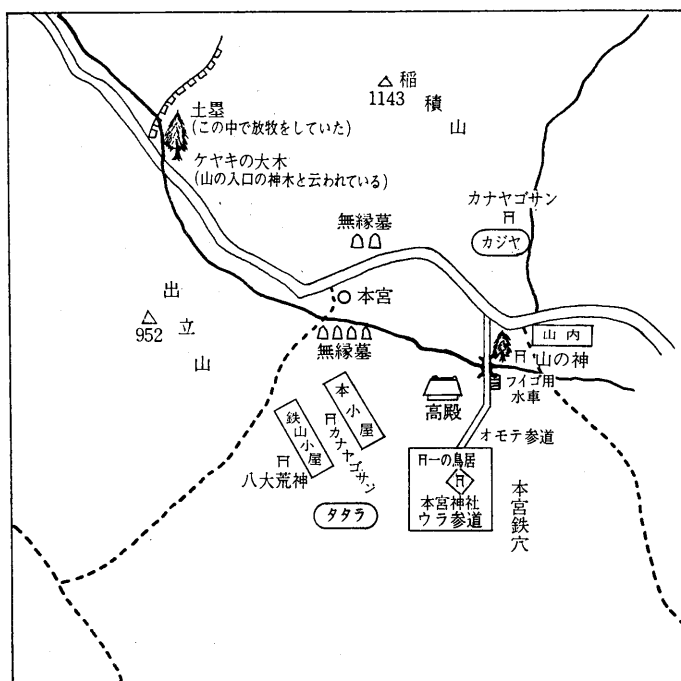


図5 出立山におけるタタラとカジャ

ラは、大正九年ごろまで続いたらしい。

現在でも清滝タタラに足を運ぶと、その遺構を確認することが出来る。タタラ坂を登りつめると、雑草の生い繁る平地が眼前に開ける。高殿の消滅したあとも、その棟柱を残して来た巨大な穴、軽くスコップを入れただけで出て来る無数のカナクソ、背後の高台に山内を見守るようにして鎮座している金屋子神の台座と、その隣りの山の神。その何れもがタタラ全盛の往時をしのぶに足る。

#### (四) 出立山タタラ

現在、村人の語り口から確認出来る出立山のタタラは、明治三十二年に根雨の大タタラ師近藤喜八郎の再建による。近藤はここで、十七人ほどの人夫を使って銑を製造していた。この人数は、山内に居て労働を続けたタタラモンと呼ばれる人々で、湯河の人々は全くいない。出立のタタラは、大正に入

ると操業を停めている。これは鉄山林の不足による。同時に山内の人間も全て谷中シノナカに移した。出立山の鉄山林は、五〇〇町歩とも六〇〇町歩とも言われるが、約十年間でその山林をすべて炭に焼いてしまったことになる。

河本の増原喜代治氏の話によれば、一夜ぶきで約二〇〇〇貫の大炭を使うと言う。これは馬で二駄、すなわち炭四〇貫を運ぶと考えれば、馬五〇匹分に相当する。これを四日四夜燃やし続ける。とともに鍛冶屋で費う小炭の量を加えれば、如何にタタラで莫大な炭を消費するかが判る。タタラは四ツ足でなければやっていけぬと村の人は言う。これは、タタラをふこうとすれば、少くとも四ヶ所の鉄山林を確保して炭の生産にあたらねばならぬ、一ヶ所の山を約十年で切りつくし炭にして、元の山に来るころには、鉄山林がほぼ以前の状態に回復していることを意味している。近藤がタタラを停めたのちも出立山では返口豊蔵により鍛冶がおこなわれていたらしく、大正八年二月五日の記事に、米子製鋼出立分工場にて年間除燐鍊鉄一五九二六ノを製造したとある。

以上、簡単に明治以降の清滝、出立両タタラに於ける状態を記した。ではそれ以前の状態はどうであったろうか。こうなってくると村人の語り口からだけでは、中々判然としない。村の中に残る数少ないタタラ関係の古文

書等を最大限に利用して、その解明に努めなければならぬ。

前述したように湯谷山においては、鑪谷尻、清滝タタラの二ヶ所が確認されるものの、前者は小字名のみ、後者に至ってはその操業の開始は明治以降であり、問題外である。残るは出立山のタタラであるが、注目すべきは、図6に示した湯谷村に於ける鉄穴、川口の様子である。この図は、天保十一（一八四〇）年の「湯谷村、鉄山所、鉄穴口、川口御改帳」を参考とし、湯河の坪倉久嘉氏の話聞きつつ、作成したものである。

この時代既に、鉄穴場五ヶ所（内一ヶ所は位置不明）、川口十四ヶ所が開かれている。その所有者も、ほとんど湯河、河本両村の地の者である。

この事実から出立山の開発は、遅くとも天保十一年以前ということを推測させるが、残念ながらそれを示す詳しい史料は乏しい。ただ多里の常福寺ツチノミの過去帳に

戒名 道清禪定門 七・二天和元年

岩崎清兵衛出立山長三郎の父

と言う記載が見られる。この長三郎と言う人物は、寛文十二年ごろ、父清兵衛とともに出立山の開発のため、仁多郡と日野郡の間に聳える船通山に近い上萩山の地より、この湯谷に移って来たものらしい。以後、清兵衛、

長三郎父子は、湯谷、河本両村にて着実に田畑を増やし、その地歩をゆるぎないものとしていく。長三郎は、岩崎の開祖より数えて四代目にあたるが、開祖次郎右衛門は、現在の島根県仁多郡仁多町で製鉄業を習得した。のち縁有って多里郷に移り、旧野組村に居を構え製鉄を営むとともに田畑を開発した。晩年は奥日野構初代大庄屋となったほどの人物である。

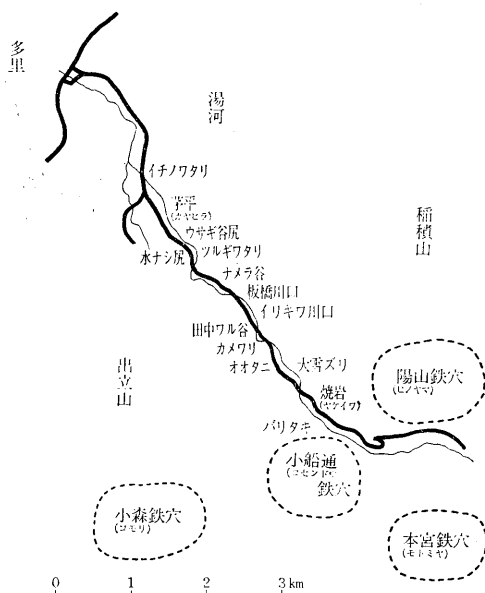


図6 湯谷村に於ける鉄穴川口の位置

では長三郎のうったタタラは、一体どのような形式のものであったろうか。旧来の野ダタラに代わる粘土製のタタラは、文永年間に出雲飯石郡菅谷（現吉田村）に始まると言われている。長三郎のうったタタラが旧来のものに代わるそれであったことは、疑いをはさむ余地がない。そのことを裏付ける有力な事実とは、彼がまた有能な鉄穴の開発者でもあったと言う伝承がさし示している。俗に「砂鉄七里に炭三里」と言うが、これはタタラが、その範囲で原料を調達出来ない限り、採算もとれないと言うことである。出立山にある本宮は現在でもセندگانグラと呼ばれ、砂鉄の埋蔵量の多いことで知られている。この有力な鉄穴を開発したのも、この長三郎であったと村の伝承は語っている。

永代タタラをうち、それによって商品利潤をあげようとするれば、砂鉄埋蔵量の高い有力な鉄穴場を掌中にしなければならぬ。すなわち出立山の鉄穴場の開発は、永代タタラの設置に伴って、この当時、飛躍的に進んだと見るべきであろう。

上記の史料によって、出立山のタタラの歴史は寛文十二（一六七二）年ごろまでは遡ることになる。では、そ



れ以前の状態はどうであつたらうか。こうなつてくると直接出立山について物語る史料は皆無である。だがここで氣にとめておくべき事がある。それは出立山という地名である。現在、出立と書き慣わしているが、その呼び方は「シッタテ」である。仕立山と文字をあてている場合も見られる。

時代は降る天明四（一七八四）年、同じ日野郡の住人で生涯鉄を生業とした、下原重仲のあらわした『鉄山必用記事』という書物がある。これは、金屋子神および鑑に関する克明な記録であつて、当時の実況を知る上で誠に貴重な文献である。その冒頭に書かれた「金屋子神祭文 雲州非田の伝」を読むと、金屋子神が安部正重の問に對して

比所ニ住居シテ蹈鞴ヲ師立鉄吹術ヲ始ムベシ

と宣つたという一文が目につく。私はこの師立という動詞から仕立山の名を想うかべないわけにはいかない。仕立山の名称が、鉄吹術を開始するという意味で使われたとすれば、そして長三郎の開発以前に、この地名が定着していたとすれば、当然それ以前のタタラの存在が考えられるわけである。勿論、長三郎が仕立山を開いた寛文十二（一六七二）年に比べれば、この『鉄山必用記事』の成立はそれより一世紀以上遅れる。が、重仲自ら記し

ているように、この書物は「かね／＼物語りし事を聞置きし儘に是を書きとどめし」という性格のものであり、その中に鉄山の古態を多く留めている。

また鉄穴場の呼称も、やはり『鉄山必用記事』の中に散見する。そして、その呼称は、二つの系列に分類することが出来る。一つは仕立、陽山、小森という立地論の伝統をふまえて名付けられたもの、一つは小船通、芦谷という地形によつて名付けられたと思われるものである。そして重要なことは、湯河周辺の近郷においては、タタラ場、鉄穴場等の命名は、ほとんどその地形によつていふという事実である。それは、長三郎が湯河に移り住む前に住居していた上萩山の地に於いても同様である。

以上のことを偶然として処理することは出来ず、長三郎以前の者、すなわち仕立山の命名者によつて、その開発は着手されたと見る方が順当ではなからうか。では、その命名者たるべき人物は、如何様な者であつたか。私自身は、備後系のタタラ師ではなかつたかと考えている。

本宮鉄穴には現在も、本宮という小祠が残っている。現在の本宮は、図5でも示したように、川岸からやや離れた山中に在る。だが当初は、川の岸边に祠られてい

常磐<sup>仁</sup> 堅磐<sup>仁</sup> 夜<sup>乃</sup> 守日<sup>乃</sup> 守

千時文政六年

悠紀神殿万宗○一天奉平因伯大守御武運長 寺社奉行  
奉建立比波山本宮大明神正遷宮一字 加須屋○重氏

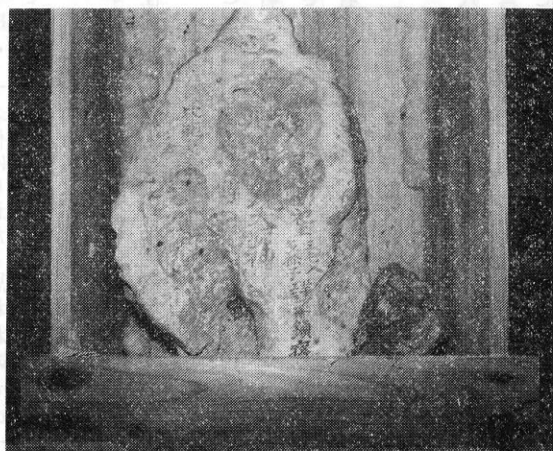
修基神殿諸源禮社須康栄国家安全五穀成就 御郡奉行  
林助右衛門

宗首庄屋伊田市右工門  
本願主新屋○谷  
多里○○○○○  
神主木山隼人正○  
大庄屋阿毘祿村木下方作  
村○○下岩見郵便  
○寄湯谷村子

た。それが大水によって湯谷まで流され、氏神とともに祀られていた。しかし、それでは本来の場ではないというので、明治十一年、現在の場所へ勧請された。村の人は、本宮をさして「今はもう流行らない神さん」と評している。以前、出立に山内のあるころには、参拝人の途絶えることもなく、参道も整備され、かなりの隆盛を誇っていたようだが、タタラの消滅とともにその凋落も決定

づけられた。現在では、かろうじて小祠を残すのみで、その確認さえ困難になりつつある。しかし、その小祠の歴史は古く、私の調べた際にも、石の御神体と六枚の棟札が発見出来た。図7にかかげた棟札はその内の一枚であり、文字もほぼ読みとることが出来た。  
この棟札によれば、本宮は比婆山より勧請されたことが明らかである。

図7 本宮神社棟札



本宮神社御神体 中島撮影

金屋子神の祭文の内容は、後半部に至って有難ごとの寄せ集め、結構づくめの感がある。そしてその成立は、近世もむしろ後期のものと思われる。<sup>(64)</sup> 断定は避けねばならぬが、備後の比婆山系の信仰に金屋子神信仰の基盤たるべき何等かの伝承が在ったのではないか。金屋子神の祭文を読むと、現在の西比田の総本祠に落着く前に何処かに立ち寄ったという伝承が多く見られる。<sup>(65)</sup> そしてその場所はずやタタラの盛んに行われている地域であった。上記の伝承は、方々にあるタタラに関する神秘的な伝承を取り入れ集成しつつ、現在見る安部氏の金屋子神祭文の成立をなしたその過程をさし示しているのではないが、私にはそう想えてならない。

地理的に見ても、湯河は備後とは極めて近接している。<sup>(66)</sup> 備後系のタタラ信仰を持つ人々が、この仕立でタタラをふいたとしても不自然ではない。本宮鉄穴を最初に開発したのも彼等であつたのだろう。勿論、本宮に残る棟札の年代は、随分新しいものではある。しかし、その新らしさが、逆に本宮に於ける比婆山信仰の古さを証明しているようである。

もし長三郎が本宮の最初の開発者であればそこには当然、西比田系の金屋子神が勧請されたるうことは想像に難くない。開祖次郎右衛門の出た仁多町は、金屋子神の

総本祠のある比田と隣接している。仁多町で製鉄を営んでいた次郎右衛門がその信仰に関係のあつたことは間違いないからうし、その子孫である長三郎も影響を受けているであろう。特に長三郎がタタラ経営を行っていた時期は、比田の社の分祠二十二社<sup>(67)</sup>を数えるほどで、中国山地の鑛地帯に於ける限り、金屋子神と言えただちに比田だというほどにその信仰体制はゆるぎないまでに確立されていた。勿論、本宮の勧請された時期にも、その信仰体制は微動だにしていな<sup>(68)</sup>い。このような金屋子神全盛の中で比婆山系の本宮を勧請した棟札の見られることは、やはり本宮鉄穴の最初の開発者の信仰を維持して来たと思われる。

諸鉄穴における砂鉄採集は、このようにして永代タタラの設置とともに、盛んにおこなわれていたようである。「鉄穴流し」は地下の者の仕事であつたが、随分危険であつたらしく、ツルハシで砂山を切り崩していく内に突然、岩がかぶさつて来たり、砂に埋もれたりする。村の人の話によれば、鉄穴場で死ぬのは漁師が海で死ぬのと同じだと言う位、当り前のことであつたらしい。

ところが明治期に入り、砂鉄採集は急激に落ち込む。村に残る「鉾山明細表録」<sup>(69)</sup>を見れば、明治十六年における諸鉄穴の営業および川口の操業は全て休業となつてい

る。その理由は明治十六年一月、島根県令宛提出された「砂鉄採集副願」<sup>(44)</sup>を見れば明らかである。これによれば、明治九年の鳥取、島根合県の際、出立山本宮砂鉄採集願いを島根県令宛提出しているが、日野川下流の福寿美、福万来両村の反対によって坐折を余儀なくされている。以後、種々の支障が重なり、結局、認可されるのは、明治十六年のこととなる。その間、鉄穴場での仕事の減少に伴って、村内では馬での駄賃付けに仕事の重点が移ったらしく、それは所有頭数の著しい変化に表われている。

### (三) タタラと信仰

前章で多くの頁を割いて、湯河におけるタタラの歴史を述べて来た。それは、現在に至るまでの村の時間的流れの中で、タタラが如何に長時間その位置を占めてきたかということの証明に他ならない。このタタラの歴史は、山内では直接労働をしたことのない人々の記憶と、村に残る数少ない古文書より作られたものである。私の当初の目的は、タタラと村落生活の関り合いについて調査するということであつた。しかしこうして歴史を編んでみると、今もきわめて鮮明に村人の記憶の中へタタラが刻み付けられていること、それ自体が村落生活における影

響力の強さを物語っている。次にやや見方を変え、信仰にポイントを置きつつタタラと村の生活の関り合いについて述べて行きたい。従来の研究ではともすれば山内の信仰と、村落における信仰とは切り離して考えられがちであつた。山内に於ける信仰は、タタラの神としての金屋子神がそのテーマにとり上げられ、閉鎖された特殊な社会での特別な神としてとり扱われる場合がしばしばであつた。勿論タタラは、火を使って鉄を造り出す、いわば特殊技能を必要とする生業である。その生業は当然、農民の信仰する神々とは異った性格の神を、生業の神として擁する。しかし既に述べたように、村の人々が山内と接触を持つことも極めて多かつた。その時、山内に祭祀してある神々について聞き及ぶことも多かつたと思われる。そして不思議な霊力を持つ金屋子神のことを、記憶に留めたかも知れない。だが、より重要なのは、山内の神はまた村内の神でもあつたということである。一年の半分は、タタラで収入を得る、ここ湯河の人々にとつて金屋子神は、そして山の神は、生活を保障してくれる神々でもあつたのである。

タタラと信仰について考える場合、まず第一にあげるべきは、金屋子神である。それはこの神が鉄を造り出す神として、あらゆる山内、特に中国地方のタタラ場に於

いて非常な崇拜を集めていたという事実による。タタラの神金屋子神はまた、鉄を造り出すという不思議な靈力ゆえ多くの伝承を附随している。その第一は、女人を極端に忌み嫌うこと、とくにその月の穢、産の穢を嫌う。第二に、犬、鳶、麻を忌む。そして、その複雑な性格の中でも特記すべきは、通常最も嫌うとされる死忌を非常に好むということがある。これに関しては様々の俗信が行われていたらしい。実際にも、かつての村下(ムラゲ)の中には、村で葬式が出ると、その行列をわざとタタラ場へ誘導し、タタラの周りを廻ってもらうようなことがあったと

言い、また炭焼の中には、炭竈の調子が悪い時、棺桶の木切れを持って来てくべるとよく焼けたと言っている。これらの俗信はかなり実行されていたものらしい。<sup>(4)</sup>湯河の場合、湯谷山、出立山両山内ともに、金屋子神の他、アタゴ、山の神を同所に祀っている。村の人の話によれば、金屋子さんはカネフキの神さん、アタゴさんは山内を火事から守る神さん、山の神さんはタタラ炭、カジヤ炭を焼くための山の木々の神さんと教えてくれる。だが実際には、村の中で山内の神々について教える乞うことは極めて難かしい。それゆえ、出来るだけ早急な質問を避け、山内の神々に関する伝承を広範囲に採集することにした。

(1) 大正の末頃までは十一月十六日に、多里神社で金屋子さんの祭をしていた。しかし、タタラが廃絶するとともに停んだ。現在では神社の裏に小祠が残るのみである。

(2) 村には金屋子神と伝える図像が残っている。だがこれに関して、由来等を聞きとることは出来ない。ただわずかに、狐に乗って山の中を走っていたという伝承を得たのみである。この図像は、通常



金屋子神図像 (多里の菅沢泰氏現蔵)

中島撮影



金屋子神の札 中島撮影

さんの餅と言って楕円に固めた餅を供えたと言う。

当地で金屋子神が直接に伝承の中に登場するのは、若干の例しか見られない。勿論、冒頭であげたような特別の禁忌も伝わっていないければ、死体を好む等の発言も全く聞いている。だがいづれにせよ、山内の神が村内の神として消化された型を如実に見ることが出来る。それは金屋子神が、家の神として祀られているという一つの型である。特に(3)の伝承は、高殿の四本柱の中の一本に、金屋子神を祀ったという『鉄山必用記事』の記載を、想い起さないわけにはいかない。<sup>(4)</sup>村の家では、それと非常に類似したならわしで、金屋子神の札を家の守り神としている。(4)の伝承は、楕円型の餅を金屋子さんの餅と言わしているが、この型はタタラで造り出される棒銃に似せたものではあるまいか。この(3)(4)のならわしは、決して特別の家が行ったのではなく、村内全戸の風であった。(2)は、金屋子神の形態に関する唯一の伝承である。これは次に述べる山の神と極めて接近している。

ユルリの在る部屋に掛けられていたと言う。

(3)村の家々では、棟上げの際、祝いの餅を棟梁が撒く。その餅は小型の俵の中に入っている。その小型の俵は、スボと呼ばれているが、餅撒きの終わったあと、それは家の棟柱に吊られ、金屋子神の札を挿しておく。お札は島根県西北田の金屋子神社から貰い受けて来たものである。

(4)聞くとくところによれば、正月にはお鏡とは別に金屋子

この村の山の神伝承は多彩であり、種々の要素がこの

神には附着している。

(イ)山の神さんの祭は、一月九日である。この日は、山に入らぬ目と言いい、もし入ると木に数え込まれてしまふ。現在も祭はおこなわれていて、単に酒を酌み交すぐらいのことである。だが祭をしないと、山の神さんの怒に触れるらしい。以前は、ヤマコがダンナに頼んで、その祭をやってもらった。今では、若松鉦山の経営者が、ダンナの役を担当する。

(ロ)山の神は白い狐に乗った女の神さんであり、山中で山猫に追われて桂木に登って助かった。以後、ヤマコは、桂の木を切ることを忌むと伝えている。また山の神さんは、白兔に乗ってやってくるとも聞く。

(ハ)興味深い伝承として、山の神は火の神だという、やや唐突な答も返って来た。というのは、以前は山仕事の際、必ず火を焚いた、その火は、山の神さんを喜ばせるために焚いたのだという理由による。

(ニ)山の神さんは、別名「木山<sup>キヤマ</sup>さん」とも呼ばれて、白い狐の女の神さんだとも言う。

以上の種々の伝承から、山の神と金屋子神の密接な関係が窺われるが、特に(ロ)については、金屋子神が桂木の森に羽を休めていたという祭文の一部と共通している。

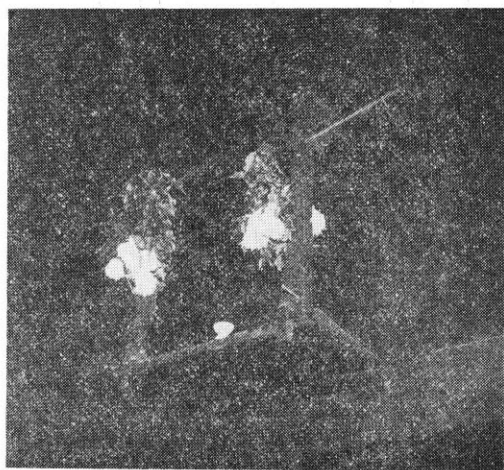
また山の神が登って助かった桂の木を神聖視して、ヤマ

コが、この木を切るのを忌むという伝承は、各地のタタラ場で耳にする、犬、鳶を嫌い、藤を好むなどの話と似ている。<sup>(6)</sup>(イ)の伝承は、山の神が火を好むということから来ているのであるが、この点に關しても金屋子神の火の神としての影響が考えられる。

次に、村内における火の習俗についてとり上げてみたい。湯河では、特に火に關する厳しいタブーが多い。それは、別火という習慣に色濃くあらわれている。

(a)村には「インキョクド」というならわしがあった。つまり、女性の生理期間中は、外に設けられた小さなクドで、当人の食べる量だけを調理する。この風習は、大正の末ぐらいまで続いていた。風習の廃れたあとも、クドのみは最近まで残っていた。今でも、一人炊きの小さな鍋、釜などを指して、まるでインキョナベのようだと言う。クドに關する禁忌は、例えば、刃物を置いてはいけない、クドを崩す時期を考えろなど、様々の伝承をもつて全国的に流布している。だが、この村では、クドに關する禁忌は聞けない。禁忌はユルリに附屬している。

(b)ユルリの中につばを吐いたり、足を突っ込んで灰だらけにしたりすると、ロックウサンの機嫌が悪いぞと言って厳しく注意される。女性の生理期間中は特に厳しく、食事の際にもユルリの火のそばに寄ることは出来



中島撮影 ロックウサン

祈禱するのはユルリの前であった。彼等は、大正の末ぐらいまで村に姿を見せていた。

以上、金屋子神、山の神、火の習俗に関する伝承を順次見て来た。三者ともに緊密な性格を有していることは明らかである。特に金屋子神は、山の神とほぼ同じ姿で村人に意識されている。また金屋子神が色濃く持つているとされている火の神の性格は、ほとんど表面に現われず、村内で火の神として現われて来るのは、ユルリの神としてのロックウ神である。火の穢に関する種々の禁忌もすべてユルリとともにある。

では、このような現象はどうして起ったのか。この点について、採集した伝承を整理しつつ自分なりに考えてみたい。金屋子神が、極めて消化された型で、家々に祀られていることは、すでに述べたとおりである。このことから考えても、村人が金屋子神を受け入れたことは間違いない。しかし、その受容の仕方はタタラの神金屋子神を受け入れたのではなく、変貌した家の守り神としてであった。また金屋子神を受け入れた時、附随して火に関する種々の禁忌も入って来たと思われるが直接それを示す伝承はない。

(d) また琵琶ふきさんと呼ばれるロックウ祓いの徒が、毎年十二月ごろ各家庭を廻っていた。火災祓いと称して、米一升をその代金として受け取っていたが、最初に

ず、一段低いところで食べねばならない。勿論、インキョクドで調理した食物をである。

(c) ユルリには、火の神様が常住している。その側の柱に小祠を作り、中には紙で作った御幣が入れている。神が鎮まらせてあるのだと言う。



の意味づけがなされる密教の護摩などを別とすれば、拝火教のように火そのものを崇拜することはない。常に、イロリとかクドとかいうように、火所と関係して信仰される。

この点から考えれば、金屋子神が本来の祭場であるタタラを離れ、村内に信仰の場が推移する時、それは同時に祭られるべき場所を失うことを意味している。が、それに代わるべき火所が村の中には在る。ユルリである。

ユルリは、古来より、村人の生活の中心として欠くことの出来ない火所であった。その中には、多くの火に関する伝承が付随している。例えば金屋子神が、山内で崇拜を一身に集める卓越した強力な神であったとしても、それが村内に受け入れられる時、村の生活に適した神格に改められなければならなかった。その結果、金屋子神の祭場は、家の棟柱へ定められ、それに付随して伝えられたと思われる禁忌は、ユルリの中に吸収されていた。

このようにして、ユルリを中心とする火の信仰は、ユルリが村の中で神聖視されればされるほど、その長い歴史の中で金屋子神の火に関する禁忌等、様々の要因を内に含みつつ採集結果に見られるような複雑な性格を形成して行ったと考えられる。

ただ金屋子神の中に、火の神としての性格を意識して

いたのではないかと思わせる伝承が一つある。それは、この神の図像をユルリのある部屋に掛けていたという事実である。これは、金屋子神の火の神としての性格が、ユルリの中に埋もれてしまう以前の段階を示しているのではないかと私は考えている。

村でタタラのことを聞くと、必ず出るのがタタラモンという言葉である。これは明らかに侮蔑を含んだ意味で使われている。タタラで働く者は、火を使って鉄を造り出す。いわば特殊技術の持ち主である。その働く場は、金屋子神の守り給う、そして女さえ近付けぬ聖地であった。とは言っても村の者の眼に写る彼等の姿は、所詮、激しい労働に日夜従事する一介の他国者にしか過ぎなかった。しかし、すでに述べたように、村の人々が山内と接触を持つことも極めて多かった。村の人々にとって、金屋子神を祭るタタラモンは軽蔑の対象であっても、神秘的な靈力をもって鉄の生産を保障し、同時に村人の生活をも保障してくれる山内の神々は、村人にとって信ずるに足る存在であった。

生業の神は、それを祀る者（それが特殊な生業であればあるほど）が消える時、同時に消滅する。そして、その存在もまた忘れられる。タタラ者が山内を去って、金屋子神の祠を残していく。その時、最も密着した型で

祭祀を行い続けて来た人間は、消え去る。しかし、村人の生活に適應すべく姿を変えた金屋子神は、村人の間で生き続け、現在にまで至っている。

山の神と金屋子神の極めて類似した伝承も以上の観点より、明らかなものとなる。すなわち、鉄をふく必要のなくなった時、金屋子神そのものは消滅したが、それに伴う伝承は山の神へ吸収されたことが考えられる。勿論山の神は、白兎に乗ってやって来るというのが、以前の形態であつたろう。それが長い時間を経る内に、村人の間で混同して伝えられるようになったのかもしれない。確かに、山の神と金屋子神は、現在残る湯河の山内に於ても極めて隣接して祀られている。その祭祀形態が決して新らしいものでないことは、二章の注<sup>39</sup>でも述べた。

このことから推しても両者の伝承の混合は、早い時期に始まっていたと考えねばなるまい。特に山の神は、火の神だという伝承は、その融合の早さを示すものとして注目される。

最後に、金屋子神が村落生活の中に融合していく過程をよく示していると思われる伝承があるので記しておきたい。

サイの神の祭は、十二月十五日で、その日ワラの馬を供える。その由来は、昔、サイの神様は金屋子神に借金



村の出入口に鎮座するサイの神 中島撮影

をして、その子の代になったらワラの馬に炭を背負わせて返済すると誓ったというものである。村では現在、サイの神様にまいると借金をしないと云って、信仰を集めている。人々は馬の背に炭の他、団子や一文銭を載せたりして供える。サイの神はまた、縁結びの神でもある。

これは、村の出入口に鎮座するサイの神が、山内の神である金屋子神と賃借関係を結んだという興味深い伝承

である。サイの神が、縁結びの神として信仰されるのも、とつつきにくい金屋子神と縁を結んだということから来ているのであろう。また注目すべきは、ワラの馬に色々のものを載せて供えるということである。すなわち炭はタタラ炭、カジャ炭、一文銭は砂鉄やカジャに運び込む銚、団子は米など山内で供給される食料ととれないこともない。私は、この伝承に山内と村の生活との関係が如実に反映されていると考えている。ここでは、金屋子神は不思議な霊力を持つ禁忌の多い神としてではなく、村の生活を保障してくれる親密な神として、村人の眼には映っている。

以上のようにタタラの神である金屋子神は、村の中での様々の神格を与えられ、現在にその命脈を保ち続けているわけである。ただ釈然としないのは、金屋子神が死忌を好むという伝承が如何なる理由をもって、消え去り、全く残っていないかということである。今のところ私の見解としては、金屋子神の火の神としての性格が、ユルリを中心とするロックウ神の中に吸収された時、通常火が穢れるとされている死忌が、死忌を好むという金屋子神の伝承を打ち消したのではないかと思っている。

勿論、石塚尊俊氏の御指摘にもあるように、火の神が死を好むという一面をその内部に含んでいることは事実

である。それは『神道集』『釜神のこと』の中でも釜神由来のこととして登場する。しかしそれは、いわゆる火の神ではなくて、もっと別の面を持った釜神と深い関係があるような気がする。その点については、後日、稿を改めて検討したい。

### おわりに

このテーマはすでに石塚尊俊氏の卓越した業績があり、浅学の私など足許にも及ばぬことは先刻承知である。しかし無力の私を駆りたてて止まなかったもの、それはタタラという生産形態が、村人の生活に与えた影響は物心両面において決して小さなものではないという認識からであった。認識は、現地踏査を重ねる内、確信へと変わっていった。その踏査結果が、この小論である。

今回の調査では、意識的に、調査地区の限定をおこなった。それは、私の民俗に対する把握の仕方から来るものである。確かに民俗学の立場から地域を見る時、それを日本全体の中で位置付けようとする方法と、地域独自のもの、そのものを見て行こうとする姿勢がある。そして、日本民俗学の選んだ方法は前者であった。しかし、私はその方法に疑問を抱かないわけにはいかない。果して生産構造等の微妙に異なる地域を、同一線上に並べて

の比較が可能かどうか。もっと村落形成の基本である生産形態を調査し、確認した上でこそ真の比較も可能ではなからうか。

そう考える内、湯河の農村の中に大きな影響を与え続けて来たタタラに、視点はおのずと定まった。

しかし、これで村の生活が、充分に把握出来たなどとは到底考えられない。村の歴史は古く、そして深い。数回の調査で何が言えよう。私が副題に「民俗誌」と名付けたのも、村の生活が、如何に広範なものを含んでいるかを強烈に意識したからに他ならない。村の生活は決して、コマ切りに細分化され項目化されるものではなく、全ては密接に有機的に結合している。「湯河民俗誌」の充実も、その把握にかかっていると見えよう。今回の小論は、民俗誌の一部である。

# 註

(1) 弘化三(一八四六)年、湯谷四十軒、川本二十軒の記載が、「村々かまど数」(日南町役場多里支局保管)の中に見られる。このことから知れるように民家の増減はほとんどない。

(2) 共有のカヤ山のこと。

(3) 村の一般的間取り(図8)、およびユルリとクド(図9)参照。また多里地域の住まいに関しては、「民俗志林」仏大民俗学研究会編、昭和五十四年十二月刊に詳しい。

(4) 湯河では、出立山の権利が村人に細分化されている。こ

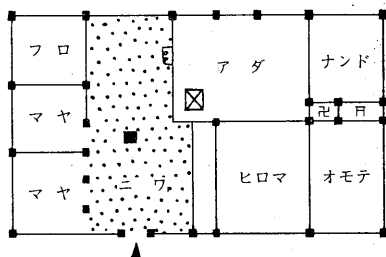


図8 一般の間取り

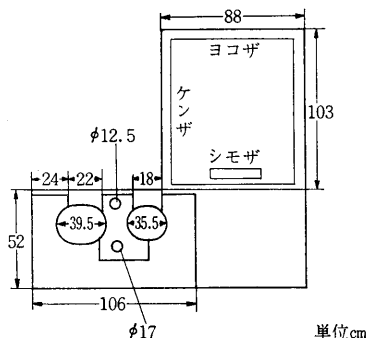


図9 ユルリとクド

のような状態の山をブアイ山と呼んでいる。これはタタラを生業として来た日野郡一帯の所有形態らしく『日野郡史』に「農村各部落の附近にある民家の燃料備林として少面積を除く他の山村の大部分は凡て鉄山林と称し数百町歩づつに区割し山名を附す」とある。

(5) 「車尾」・「来尾」という字をあてている場合が多い。

(6) 明治十年、湯谷・河本を併せて湯河と改めた。調査の対象は湯谷が主である。

(7) タタラの消滅したのちも、湯河では若松・広瀬両鉱山の経営が行われた。このクローム原石採掘にあたる労働者をガントツモンと呼び、主として湯谷の人々が従事した。

(8) 土地・家数の全てがダンナの所有下にある者を下作と呼んだ。

(9) 明治十年、多里郷八ヶ村を改め、多里郷五ヶ村とした。新屋、湯河、萩原、上萩山、多里宿の五ヶ村である。

M=明治 多里5ヶ村	M9	M11	M12	M13	M14	M16
多里宿	12	13	13	7	4	6
湯河村	67	70	78	67	33	31
新屋村	78	78	68	65	82	78
萩原村	39	36	51	53	49	42
上萩山村	29	27	35	38	20	20
合計	225	224	245	230	188	177

多里5ヶ村における所有頭数  
(子馬を除く)

上に掲げた表は、「年々牛馬取調書控略」(日南町役場多里支局保管)より作成した。

(11) タタラズミは、大炭とも云い、人の入れるような大きな窯で焼く。炭になるまで約二十日、出来上がった炭は、ガスを多く含み、一度に六〇〇貫位を出す。この仕事に従事した者のほとんどは、タタラと共に移動する專業のヤマコである。これに対してカジヤズミは、小炭とも呼ばれ、村の人の仕事であった。早朝より山に入り、枝付の木を切り出し、野原で焼く。ころあいを見計らって、土をかけ、火を消し炭とする。これをキオイコで鍛冶屋まで運ぶ。タケスンドリと云って底のない竹カゴ一杯が一升である。一升は約十貫、下手な者ほど目方が重い。一日、三杯も焼けば一人役と云われた。

(12) 明治二十九年提出の「建物新築御届」(日南町役場多里支局保管)による。

(13) 土炉を包む建物を示す。ここにあげた高殿は、丸打である。この形式は、出雲、伯耆、備後に多い。これに対して、長方形の平面構造のものを角打と云い、安芸の北部、石見地方に見られる(『日本庶民生活史料集成』第十巻所収「鉄山必用記事」)。またタタラと表記した場合、施設全体を示す。

(14) 赤目砂鉄は、山砂鉄の一種で、主に和銃の製造に用いられる。母岩は角閃花崗岩(同右)

(15) (4)と関連。

(16) 銃の不純物が、融解中浮いて来るものをカナクソと呼ぶ。

(17) 銃はそのままでは不純物を含み、半溶融状態であり、こ

れに鍛錬をくり返し、鋳滓をしぼり出す必要がある。この鍛錬を行うのが鍛冶屋であり、出立に三軒在って、タタラの大工さんと呼ばれた。

(18) 柄実とも書く。

(19) 鋳は主として刃金の材料となる。ただここであげた鋳は、鋳の製造中生じるものである。

(20) 鋳の塊をハンマーでたたき割る者をさしてこう呼ぶ。

(21) これに対して鋳の一代は、三日三夜である。

(22) 銑押法の場合、操業中適宜に炉の一面を突いて銑を出す。こうして四昼夜も続ければ、土炉は内側から侵され、薄くなってもたなくなる(『鑪と鍛冶』石塚尊俊)。

(23) カンマチは砂鉄を貯えておく小屋、シモマチは、タタラズミを貯えておく小屋のことである。この名称は、村内の上手、下手を表わす時にも使われていて、多里のカンマチ・シモマチと云うように呼ぶ。

(24) 「製鋳場建築願」(日南町役場多里支局保管)は、明治三十二年に出されている。実際に再建したのは、二年後のことである。

(25) 日野郡日南町河上字谷中。

(26) 「砂鉄精錬業明細表」(日南町役場多里支局保管) 大正八年二月五日の記載による。

(27) 日南町役場多里支局保管

尚、御改帳の中に、芦谷鉄穴という記載が見えたが、その位置は不明である。

(28) 曹洞宗常福寺。開山は天正年中と伝える。

(29) 「岩崎山根家資料」山根林著、私家版。

(30) 「増訂中世日本商業史の研究」豊田武著、昭和二十七年、

岩波書店。

(31) 一ダンは約二十五貫と聞く。本宮のある場所は、現在高台のようになっているが、砂鉄の含有量の高い鉄穴場というので、周囲を削り取ったためである。そこには、鉄穴流をした川筋が無数に残っている。

(32) 「天保九年御田地畑山林鉄穴川口覚帳」(日南町役場多里支局保管)には仕立山と見える。以後出立山という名称が多く使われるようになってくる。

(33) 『日本庶民生活史料集成』第十巻所収 飯田賢一、田淵実夫校訂、昭和四十六年、三一書房。

(34) 「鉄吹初る時をコモリと申なり、こもり粉鉄見様の事」「鉄穴流しやうの事(中略)陽山は水少くても邪魔なし」とある(傍点は中島)。

(35) 小船通という名は、長三郎の住んでいた上萩山の近くに登える船通山と関係があると思われる。

(36) 図10参照。

(37) 「神社勧請願」(日南町役場多里支局保管)によれば、この年、出立山本宮に大山祇神を勧請したとある。

(38) 六枚の棟札の外、数枚が水害の時、流出したと聞く。

(39) 『鑪と鍛冶』石塚尊俊著、昭和四十七年、岩崎美術社、石塚尊俊氏は、金屋子神祭文中に「土農工商」などの語の見えるところから、成立の時期を近世もむしろ後期という判断を下しておられる。私が思うに、金屋子神そのものの形成も比較的新しく、その複雑な性格は、安部氏の強力な金屋子神信仰伝播の時期と合致しているのではないだろうか。と云うのは『鉄山必用記事』の「鑪の内外ニ奉祭所ノ神号」を見ると、タタラ場に祀る神々として、金屋子神の

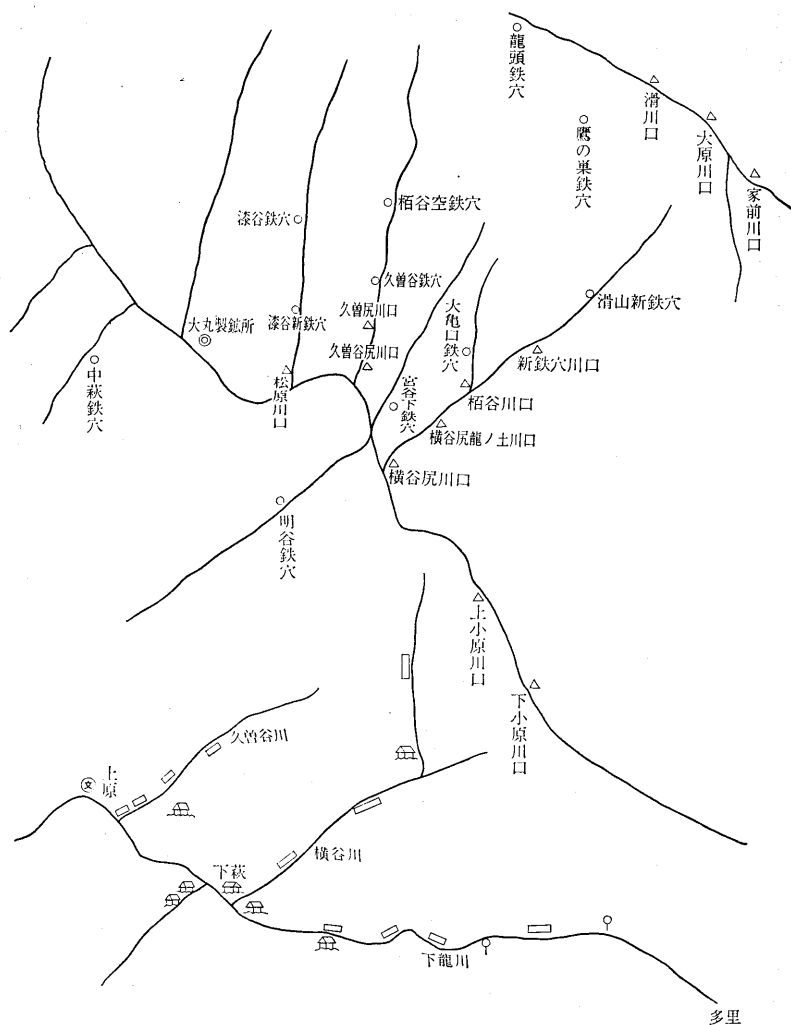


図10 上萩山にみる鉄穴，川口，カナクツ（注 ○：鉄穴 △：川口 □：カナクツ）

他、四行ノ神、すなわち天目一箇神、山ノ神、火神が記されている。これら四神は『鉄山必用記事』の記された時には、すでに形骸化している。

現在タタラ場で確認出来るのは、金屋子神以外、山の神愛宕神がほとんどである。そして愛宕神は、重仲の指摘を待つまでもなく「比叺ノ仕習」である。火の神というより火伏せの神としての性格を濃厚に持つ。すなわち金屋子神の威力が安部氏によって宣伝されることで、山内の信仰は弥が上にも高まったが、その反面以前より祭祀され続けていた神々は衰滅した。その神々の持っていた伝承が金屋子神に吸収された。つまり、タタラに従事する人々の間で諸神の伝承が、無意識の内に金屋子神へと吸収されていったとは考えられないであろうか。そして、その伝承の吸収化現象は、重仲の云う三神の形骸化（火神、水神、天目一箇神のタタラ場での消滅へとつながる）に明らかに示されているのではないだろうか。

- (40) 金屋子神祭文中には、播磨国志相郡岩鍋に寄ったとある。その他、奥州岩狹郡信夫庄（金山姫縁起）、備中の山中（飯石郡吉田村菅谷鐘）、日南町印賀（伯耆日野郡山間部）、など様々の伝承がある（『鐘と鍛冶』石塚尊俊）。

- (41) 湯河からは、極めて近い広島県比婆郡東城町八幡は古く盛大なタタラ場のあったところである。そのことは、『鉄山必用記事』の「第二、鉄山に謡馴し 踏輪歌の事」で、「西條か奥の八幡林の（後略）」と歌われている。

- (42) 出雲に三社、伯耆日野郡に三社、備後双三郡に七社、備後甲奴郡に一社、比婆郡に四社、石見邑智郡に四社である（『鐘と鍛冶』石塚尊俊）。

- (43) 日南町役場多里支局保管

- (44) 同右

- (45) 日野郡日南町福寿美、日野郡日南町福万来

- (46) (一)村のくらし注(40)参照。

- (47) 中国山地のタタラ地帯に於いては、鉄穴から、タタラ、大鍛冶、小鍛冶、鋳物屋、鋳掛屋さらには炭釜に至るまで、こと鉄に関する職場ではすべてこの神をもって守護神としている状態であった（『鐘と鍛冶』石塚尊俊）。

- 筆者の調べた日南町多里でも、金屋子神の小祠が相当数残っている（図1参照）。

- (48) 『鐘と鍛冶』石塚尊俊

- (49) 「多多良ノ内、元山押立ノ後ニ鎮坐成奉元山押立柱ヲ、即チ神ノ御柱ト定テ祭ル。」

- (50) 「出雲国野義ノ郡ノ黒田之奥非田ノ山林ニ着キタマヒテ、桂ノ一樹ノ枝末ニ羽ヲ休テ坐ス。」

- (51) ひかし金屋子さんが吉備の中山という所へ天降らっしゃった時、四ツ目の犬が吠えかかった。そこで金屋子さんは薦にさのぼって逃げようとされたが、薦が切れたために犬に咬まれて死んでしまわれた。それで金屋子さんは、犬と薦が嫌いだである（伯耆日野郡多里村、村下永間福次郎氏談『鐘と鍛冶』石塚尊俊所収）。

- 同じ多里村内で、タタラに従事していた人と、農業に従事していた人とは、これほどまでに伝承の内容が相異なるのは、注意すべきである。

附記、この調査は、一九七八年八月、九月、十月、十一月、十二月に実施した調査結果による。宿泊の便宜をいただ



いた日南町役場多里支局の山根先生、福田様、筆者の質問に貴重な時間をさいて下さった皆様に心から礼を述べたいと思います。また小稿をなすにあたり御教示を賜った仏教大学文学部教授竹田聰洲先生に、記して謝意を表します。

